

子どもの発達と環境

子どもの環境認識と夢の育み、より良い環境づくりへ

2018.10.10 to

1. はじめに

子どもをとりまく環境は、子ども環境改善で頑張っている方々をしり目に、大人の論理（大人の都合優先）が押し寄せて、子どもしさがどんどん失われているかのようである。例えば、子どものためにと称して、情報や物があふれ、かまいすぎが横行し、しかも子どもが大人の顔色を窺っている。そんな子ども世界が社会や自然と切り離される傾向が大いに気になる。では、これらをどう受け止めて改善していくべきか。そこで著者は、まず子どもと環境のそもそもの相互関係を根底から検討し直すべきと考えて、子どもが環境を如何に捉え、その環境のなかでどう育って行くかを問うべきとした。今回は子どもの空間や形の認識と生活から積み上げていく想像力に着目し、環境と子どもの素養についての論究とした。

2. これまでの取り組み

この種の問題を子ども能力育成の一環として子ども造形センス育成を念頭に置き工作教室、絵画教室、特別授業、何でもワークショップ、辻対話・辻遊びを2000年頃から始め今なお細々と続けている（下記欄）。対象は未就学児、小学生、高校生、時には大学生や成人であり、高校生以上は遊び交流を目的としている。なお著者は子どもから大人までを対象とするのは、子どもに対処する人がどう子ども期を過ごしてきたか、大人が子どもにどう接するか、大人と子どもと意思疎通の連続性をも検討したいためである。

- ・マップづくり（自分の住んでいる街）
- ・遊び場づくり：スケッチで
- ・形あるものづくりや家づくり（ダンボールで）
- ・夢の家づくり（各種材料で）
- ・部屋作り・家具づくり（スケッチや模型）
- ・認識ワーク（スケッチで形や空間の認識遊び）

3. 形とそれを包む空間の認識 本稿では視覚情報の形のみに限定（色や物性は扱わず）

3.1 形と空間の認識

(1)人間にとて、形認識・空間認識は備わった素養であるが、これがどう培われてきたのであろうか。生活体験の中で考察したい。子どもは乳幼児のうちは平面図形から認識し始め、成長するに従い（視覚や触角から）奥行きを認識し立体を認識し、また図でも立体でも全体空間に対しての位置関係という関係性を認識していく。こうした過程がまさに子どもを取り巻く環境の観察・認識である。視覚認識として整理すると；

- ・図と地として「形あるものと空間」
- ・形は平面図形から立体まで（形状、大きさ、質感）
- ・空間は奥行きと広さ、無限遠も
- ・空間の中での形や形と形の関係性→表情、意図

上記の事柄の見える化を瞬時に描くスケッチで実施する。以下に事例をいくつか掲載する。

(2)描画における思いの形化とその読み取り　・描きや読み取り対象は「図と地」であるがここでは「全体と個」とする。描きは全体(画用紙)において複数の個(形)を配置するイメージである。全体に対しての個の位置関係あるいは個と個の間の位置関係が思いを兼ね備えている
・まず描き場合、大人は全体に対しての個の思いを意識するので、全体から個への配置を考えて描く。これに対して子どもの場合は、全体よりも個の意識が強く、個の描きに集中しがちである。

・そして描かれた思いはどう読み取られるか。読み取り方は描き方と正反対の関係にあり、大人は「全体から個へ」、子どもは「個から全体へ」の経路を主に踏んでいる。ただし、主と断ったのは、経路はもともと双方向ものためである。

(3)全体について　全体と個という枠組には全体の視点のグレードをどこに置くかで種々の全体を想定できる。例えば、家という視点ならば「家族と個」の枠組み、街という視点なら「街と家」の枠組み、環境という視点なら「環境と人間」の枠組みになろう。

・全体において基軸の存在がある。一つは水平と鉛直であり、二つには光線である。

3.2 形の認識

(1)子どもは図形をどう捉えているのであろうか。子どもの成長と図の捉え方の関係を見るには、まずは平面図形の描き方を検討する。子どもの最初に遭遇する図形は円といわれている。そのうち、四角形へとパーティ―が広がっていくが、スケッチの場合は、円や円的な曲線を描くようになる、直線や多角形はずっと後の年代になる。

・子どもが立体を意識してくると、四角い箱(立方体)をスケッチできるようになる。立体の認識過程については、小さい時は正面から見る四角の形が先に認識し、側面の四角は正面の続きとして右側面は正面の右側に、上面は正面の上側に、といったように描く。小学校高学年や中学校以上になると、奥行きという概念が入ってきて、基本となる面から奥行きをつけるように描く。時には上面から下方に厚みをつけるといったスケッチもある。高校生くらいになると瞬時にペース図法のように描くこともままある。

(2)複体になると、各々の単体の形状ならびに配置具合が描きの要素となる。特に、単体間の距離や向きなどが関係性として意味を有するように感じることができる。

・例えば、立方体二個を描く場合、大きさが同じく、両者間の距離は立方体の1個から1.5個くらい離している。二個が重なるとか、大小の大きさ違う二個描きは大人でもほとんどない。

・もう一つの例は大円1個と小円2個を描く場合。ほとんどの人は大円と小円が水平に間隔をあけて二個並べる。親が子を二人連れているといったイメージがある。中には、顔をイメージして。小円を目にしたり耳にしたりもしている。大人では、小円を大円に内接もあり。

(3)自然物や人工物は複雑な形状の単体が複合したものとして、複合による表情が生ずる。

(4)絵嫌い。小学生くらいまではいいが、年齢を重ねるとともに、多数が絵嫌いとなっていく。理由はひとつひとつの物の形が正確に描けないこと、全体のバランスがうまく取れないことにある。とはいえるとも期の描きで磨かれた感性は大人期に引き継がれていく。

3.3 図と地としての空間　　形あるものの外側が空間。複体の周りすべてが空間。また、形あるものが内空(中空)であれば、そこもまた空間である。

3.4 形の効用 実際物は形の情報として認識される。実際物を単純形状にまとめあげることに際しても対処する人の意思が入り込む。逆に、意思でもっと実際物を構成することもできる。これが、形をもとにした環境に対する認識そのものといえる。

4. 空間認識 空間といつてもいくつもの形あるものの関係性といったほうが妥当である。

4.1 街の地

空間には、前節で扱った図と地からくる地という空間と図が中空である場合の空間とがある。一方、街のように(図が)大きくスケールアップすれば、街全体のそれこそ図と地が一体となった地ができる。そこに、理(屈)が見つけられれば文字通り地理となる。こうした地において、子どもは地をどう理解し認識していくのであろうか。子どもに街の図(地図)をスケッチさせると、街全体、極近所、日常生活圏、小学校圏などが描きの対象として、印象や認識の様がよくわかる。もっとも、通学路、遊び場、といったように目的を持たせての描きでもいいが、著者は子どもの生活圏として学校、時には幼稚園・保育園、遊び場、買い物先(郊外店は除く)、駅、ご近所さん、友達の家、空き地、神社仏閣、水田他を街の図として描かせる方法をとった。これにより得られることは(数多くあり);

- ・各場所の(子どもにとっての)印象・重要度がある程度判明。遊び、勉強の重要度
- ・各場所の印象ポイントが判明。ランドマークであったり、四つ角であったり、
- ・人間関係の濃さ(分る場合あり)
- ・距離や大きさは物理スケールでなく印象スケール
- ・工場や事務所建築などの認識が極めて低い。

要は、子どもの生活に直接目に見えて関わるもののが当然印象強く、それが環境というもの。

4.2 街や野外の描写、建物や室内の描写(人物画は略)

(1)街 一点パース図法や鳥観図法で描くと、街の地が立体的に把握できて面白いが、子どもはそういう訳にはいかない。それでも、建物を写生していて周辺の景色としていろいろなものが目に入る。とりわけ目につきやすい造形物として、高い構造物や森などが描かれることがある。

(2)野外 ・野原でのスケッチ(写生)では一番多いのが道と電柱。もちろん電柱は一本の棒で先端に一本の電線がつながっている、といったものである。何か目立ったものといえば電柱だけなのかもしれない。 ・里山を描く場合には、スケッチではかなり困難であり、水彩画では緑系統の色をいくつか用意して塗ることで森林ノール山を描くことになる。

・並木道のスケッチでは、不思議と斜め上方から見るか道の真上からとか道に沿ってあるいは道と直行するようにして描く。もちろん、北海道くらいの広大な地ならば無限遠はあるが、そうでなければ大人でも無限遠は描かない。それだけ平野には街がぎっしりあるということである。

(3)建物 子どもの時の写生は動くものに关心があり、家や建物を描くことはそんなに多くはない。理由をあげれば、戸建て家を描くのは細部にわたり形を描く連続のため、むずかしいものといえる。その点、ポンチ絵のようなものであれば書きやすいであろう。

(4)室内 家を描きにくくても室内を描くことは多々ある。このうち家族での食卓の風景は家族の親密度が色濃くあらわれていることはいうまでもない。両親とも稼ぎで子どもがひとり食す絵は孤食として大いに問題になってもいる。また、食卓上の食べ物を描いた絵で

は、食に対する姿勢があらわれている。おいしそうな食べ物を美味しそうに描くのは困難なことにしても、好物とか嫌いなものなどが見て取れることもある。

5. 子どもの成長と環境

5.1 IT やゲーム

小さい時から IT 関連の情報に触れることが圧倒的に多くなった子ども。そんな情報洪流の中で子どもは仮想現実の体験を蓄積していている。IT 技術そのものがよりリアルになってきているが、リアルさの実体験が伴わない視覚情報のみに頼った体験蓄積が今後どう成長にかかわっていくのであろうか、これを憂う。

5.2 便利さとかまいすぎが実体験を遠ざける。

- ・山村の古民家で子どもの自由あそび。お盆の時期には訪れる多くの子どもにスイカをふるまつた。その光景を見ていると少なからずの子どもが市販のスイカのカットフルーツに慣れているせいか昔ながらの食べ方をしらなかった。

- ・子どもに農に触れさせ体験。田舎でも人はあまり歩かなくなったこと、たとえ農道を歩いていても(米以外の)農作物を見る機会がめっきり少なくなってきた。農作物が実と茎や葉と一体である姿がますます見えにくくなっている。

- ・ビオトープで多様的な植生を再現とはいっても、都会ならいざ知らず、田舎では特別の囲い込んだ環境だけで実現させるものではなく、田舎全体で植生の多様化を図る。

- ・こうしたことがなぜ起こるか。科学技術の発達により自然はコントロールされるものとの認識が街から自然をとりさり、その穴埋めにグリーンを確保するといったことである。ビオトープでも自然の囲い込みそのものといえる。何か抜本的に、自然を我ら生活空間に自然を取り戻すように意識を変えていきたい。

6. 夢

子どもにとって、長年月をかけ人間的触れ合いを通して環境そのものおよび人間社会が認識され、その際、実際物と実際空間という図と地の認識が視覚情報として基礎づくことを前節で述べた。ここでは、そのような認識の上に積みあげられる生活体験からの創造・想像を夢として捉え、これを将来就きたい職業と夢のある家づくりから分析する。

6.1 将来就きたい職業(子供の捉える職業イメージ)

- ・社会人のイメージ イメージ対象として職業を選ぶ。子どもが考える職業には、よく民間会社調査によるなりたい職業ベストテンにあるように、職業役割(手や足)を動かす仕事であり、そこにはサテリーマンは入ってこない。小さい子に親父さんの職業は聞くと、会社員という言葉が返って来るが、ホイイカラーは仕事のイメージから遠い存在である。

- ・職業体験テーマパークのキッザニアや各地のミニミュンヘン(名古屋のだがねランド、千葉のミニタウン佐倉など)では、どういう訳か小学生対象の調査結果によれば、デスクワークのものではなく、食べ物屋とかスポーツ選手とかいったものが浮かび上がる。要は目隠しにする(働いている姿が見える)働く人に関心が高いのである。

6.2 子どもが抱く造形観

子どもの造形物への思いをダンボール模型制作により分析する。

(1)子どもがもつ造形観：材料がダンボールとあってか、現実世界にあるものが題材になり、ほ

とんどの子どもが身の回りのものを対象としていた。列挙すると；

- ・身の周辺：家、椅子、棚他
- ・機械：飛行機、ロボット、ロケット、他。
- ・動植物：象、他
- ・空想の世界：オバケ屋敷、空想的な城、他。

(2)子ども観察力：身のまわりの造形物の形情報をどの程度把握しているか。例として、子どもに家を描かせ、家に着いての物理的イメージを探ってみたところ；

- ・屋根は三角形。
- ・平側の縦横比1対2程、妻側は1対1程。
- ・背の高い家や横に広がった家を描かず。
- ・窓や扉をそこそこ描かく。・地面は描かず。

これより、屋根の一般的な形状や建物の縦横比といった形のプロポーションは大体把握されている。これは、近所に家が実存していることから情報を得るよりもアニメや漫画により描かれている家からの情報によるものではと思える。何にしても日常生活空間のイメージが作られていくといつてもよいであろう。

6.3 夢のある家の製作(スケッチと模型製作)

夢というキーワードで子どもが造形物をどのように認識しているかを見るために、家について各種材料を用いた模型制作により分析する。

- ・純然たる夢：希望が夢となった場合、景色がいいところの家
- ・現実的：住みたい家、庭のある家、室内が見える家、ビル、透明な家
- ・連想：食物(とんかつやお菓子)、木立、大きな靴、他
- ・異色としてUFO、ロボット、ロケット、パイプ家、塔、カラフル屋根なども。

夢のある家や未来の家の絵画についてはあちこちでコクーンがあるが、著者の場合は、夢の表現としてのお家は、アットホーム的なもののが多かった。理由は、親子参加で親が傍にいたせいもあるが、家族そろって住めること前提としていた。やはり、ワークショップスタイルでスケッチ後や制作中の子どもの会話が功を奏したようだ。

- ・子どもの着目ポイントは、家の形(屋根の形も)、庭、家の内部、中身部屋といったところである。屋根については、三角形や円錐が多く、いわゆる上に突き上げる形状がなじみ深いともいえよう。また、壁には窓を設け、壁をくり抜く。その考えの延長線であろうか、屋根にもくり抜きがあるのは屋根を通して空を見たいという願望なのであろうか。
 - ・室内では階段の着目が多かった。室内空間の第一要素として印象が深いのであろう。
 - ・着彩としては、概ね原色、しかも黄色や赤の明るい系統のものが多かった。木造なら茶色、ビルなら灰色といった決め付けは無く、自由に色を選んでいた。ただし、地面や草などはそれにみあった色となっていた。環境から周辺からの印象の深さが反映したものであろう。
- (本稿は前研究集会稿の続編、機会あれば写真で)

7.まとめ

成長過程に着目して子どもの環境の認識や(子どもなりの)環境への働きかけという観点で、子どもの形や空間の認識ならびに積み上がる想像力(夢)について議論し、現実環境の実際物や実際空間が子ども生活の営みとリンクして環境認識があることを述べた。